

UG REPORTS

1991.5.28 Vol.01

我々自身を知り、豊
かさを追求し、未来
を見つめる一。

UGビジネスクラブ
は、在日コリアン企
業の社会的地位の向
上とビジネスネット
ワークの確立、情報
収集と事業機会の拡
大を設立理念とし
て、1990年11月に結
成されました。



SINCE・1990

目次

- 📌 UGビジネスクラブ設立総会開催
- 📌 呂有洵会長あいさつ
- 📌 活動報告
- 📌 会員の声

UGビジネスクラブ設立総会開催

若い日商工人の英知とパワーを結集する『UGビジネスクラブ』設立総会が1990年11月14日、風光明媚な三重県長島温泉「ホテル花水木」で開催された。

会場には全国各地から会員、関係者約50名が駆けつけ、早くも親しげな交流が始まった。

南利道氏の司会の下、午後3時、全尚烈氏が高らかに開会を宣言した。

続いて呂有淵準備委員長が挨拶に立った。呂委員長は「UGビジネスクラブは全員企業の発展を促し、日本の経済界においても重要な地位を築くために役立つことを目的とした在日同胞のビジネスクラブです。当クラブの設立は、全国ネットの同胞企業間での異業種交流を行うことにより、知識経験を集結化することで、信用面・技術面・人材面など中小企業のもつ問題点を克服する契機となるものであり、そして異分野企業の知識の融合化によって、新分野の開拓・開発促進にもつながるものと期待されます」と設立の意義を強調した。

さらに第13回世界青年学生祭典成功の一翼をになった旧「ひとみ全」を発展的に解消した後、審議会、ブロック会議をはじめとした準備委員会を積み重ねてきた経緯をふり取りながら、「まさにUGビジネスクラブの誕生は、準備委員会役員や会員各位の熱意と御協力の賜物と深く感謝します。同クラブの旗揚げを契機として、皆様方の知恵と経験を結集して共に前進していきましょう」と力強く呼びかけた。

議長に指名された姜明求氏の進行により、UGビジネスクラブ定款の決議に入り、満場一致で承認された。

引き続き、新たなスタートを切った当クラブの運営にあたる初代役員の任命が行われ全長1名、副全長4名、常任理事8名、理事4名、監事1名、計18名が拍手で承認された。

新役員を代表して、呂有淵会長が演壇に立ち、「当クラブ設立の主旨にのっとり、役員も全員も全員参加の下に立派に築き上げていきましょう」と決意を表明した。

最後に文弘宣副会長が活動報告（要旨別掲）を行った後、全尚烈副会長が閉会を宣言し、UGビジネスクラブ設立総会は成功裡に幕を閉じた。

休憩の後、当クラブ設立を祝して記念講演が行われた。

講師は(株)インターナショナルブレンネットワーク代表取締役社長・(株)船井総合研究所取締役・和田一廣氏。

企業の戦略策定やマーケティング面で多くの指導実指を残されている和田氏は、UGビジネスクラブの設立に対して祝辞を述べられた後、情報化時代、国際化時代といわれる今日において事業を革新・発展させていくうえできわめて示唆に富んだ提言を行ない、参加者たちの胸に深い感銘を刻まれた。

第1部が終了した後、式場を移して、午後6時30分より第2部の懇談会に入った。弦楽四重奏“ネオ・名古屋フィルハーモニー”が奏でる名曲の数々をBGMに全員たちはパーティー会場に入場。

呂有淵全長がステージに立ち、興奮気味の表情で「UGビジネスクラブの発展のために全力を尽くそう」と挨拶を述べ、威勢よく「乾杯！」

テーブルごとに全員同士のなごやかな交流が進む中、ステージでは東北、関東、中部、関西、中・四国、九州各ブロックのメンバーが順次登場し自己紹介と挨拶を行った。会場内は和気あいあいの雰囲気若々しい情熱と決意に満ちていた。

全日程が終了した後、全員たちはそれぞれの部屋に入り、今後の当クラブの運営についてさまざまな意見を交換した。

一同はまだまだ暗中模索の状態から第一歩を踏みだしたばかりではあるが、21世紀にむけてグローバルな視野に立ち斬新な活動を進めていこうと語りあった。

UGは若いパワーを秘めて今や飛び立った。前途にはさまざまな困難もあるだろう。しかし文字どおり「UG」に参加した全員たちの「有志」を一つに結集し、未来に向かって全力を冬くしていこう！

呂有洩会長あいさつ

呂有洩会長挨拶（要旨）

私、本日UGビジネスクラブ初代会長という重職をお受けし、誠に栄誉でありながらも、たいへん重い責任をひしひしと感じております。

遠からず迎える21世紀に向けて、昨今は出際情勢が激しく揺れ動いています。またわが国においても民族最大の念願である祖国統一に向けて諸情勢の流れが急速に活発化しています。このような状況下で、当クラブの設立が在日同胞商工人の経済的地位の向上と、ひいては祖国の統一・繁栄に寄与することになれば、この上なく喜ばしいことと思います。

当会は当面、情報交流事業、人材育成事業、合弁事業そして会報発行事業を4本の柱として、全を運営してまいりますが、何しろ不備な点多々ございます。私は率先垂範いたしまして皆様との切磋琢磨のなか、粉骨砕身努力する決意であります。

みなさん。一世同胞たちが築いた有形無形の財産を継承発展させ、また、次の世代により素晴らしいものを残すためにも、全員参加のもと、UGビジネスクラブを立派に築き上げていきましょう。

活動報告

日本という社会は在日同胞にとって決してフェアなチャンスにあふれているところではありません。いざ生活や企業活動の領域を拡大しようとするとき、それらは猛威をふるって襲いかかってくるのがしばしばです。

私たちの先輩は「だから協調し、団結しなければならない」と強く唱えました。もちろん、こうした考え方はこの会の基本理念にも受け継がれるべきでしょう。しかし、「協調、団結」という言葉だけでは、いまの若い在日企業家たちを納得させることは難しくなっています。私たちには、さらに深い認識と研究が必要とされています。

この会を運営するにあたって、今後みなさんと共に考えていきたいテーマが三つあります。

一つめは「われわれ自身を知る」

二つめは「豊かさを追及する」

最後に「未来を見つめる」

実にこの三つは会のコンセプトに基づいているのです。

まず、「われわれ自身を知る」ということは、在日という条件とその歴史的経緯を知り、私たちの“体質”を知ingことを意味しています。

戦後、一世たちはパチンコ、焼肉屋、くず鉄、下請け製造・加工業など限られた業種のなかで奮闘し、築き上げたものは少なくありません。そして、二世、三世は多くを受け継ぎ、発展させてきました。しかし、社会的地位や多様化という面においてはどうかでしょうか。

資料は商工会会員の業種を分類したものです。1977年と88年を比較してみました。(表1)

「その他」というところが増えているのは、項目外の業種の増加を意味していますが、いまだ業種の偏向は著しいようです。

一世は、限られた範囲の中で「選ばざるをえなかった」という必然的な部分があったし、二世も厳しい就職差別のなかでは「家業を継がざるをえなかった」というケースが少なくなかったのです。

権利の限られた社会で、在日の商工人たちは“力”というものを非常に意識してきました。例えば採算に対して非常に性急です。一世たちが「はやく儲けて、国へ帰ろう」と考えたのは自然なことでしょう。そして、二世、三世の時代になってもその傾向は多分に残っているようです。

ここ十数年、私たちは日本の経済発展とともに資本を急増させ、企業を拡大してきました。が、その結果、在日同胞企業は資本の部分だけが突出し、企業という点においては遅れた体質のままで、全体的にアンバランスな形を保っています。人材が集まらない原因の一つでもあります。これからは中・長期的な視野にたつて企業集団を生かすための先行投資をしていかなければいけか、と思います。

自身を知るという意味では、今後企業化していく過程で、「所有と経営」のバランスについて議論がなされるべきでしょう。

在日同胞企業も本国の習慣と同じように長子に財産を相続させるケースが多いのですが、企業が大きくなるにつれて同族だけで経営することが難しくなります。

同じアジア文化圏のなかでも韓国と日本では財閥の支配の仕方が異なると言われます。例えば、韓国の50大財閥グループの807系列会社の中で238社、実に約30%がグループ総帥およびその一族によって経営が行われています。日本では、大企業332社のなかで同族支配が貫徹されている企業は13社、約4%にすぎないという分析があります。

二つめの「豊かなものを求める」ということは、当然ながら利潤を求める活動も含みます。すべての経済活動の目的は「人間が豊かになるため」と言えるのですが、ここではさらにその概念を強調する必要があります。豊かさという解釈を誤っては企業は社会から隔離された存在になる恐れがあるからです。

これからの在日企業は社会をバックにして成長しなければいけないと思います。企業にとって物質的な豊かさを例えを資本とするならば、メンタルな部分の豊かさとはなんでしょうか。それを、企業の持つべき社会性であり、人間性である、といえ聞こえが良さすぎるでしょうか。

UGの結成目的のなかでも最も大切なのが在日のネットワークを経済活動に生かすことなのですが、それには会員同士の様々な情報交換、共同戦略もさることながら、こうした集いを通して皆さんが向上心を高め、経営理念に磨きをかけ、経営者としての文化的素養を多く身につけることでもあるのです。

最後の「未来を見つめる」というのは、現状だけに固執しない経営姿勢をもち、事業の展望を先行して見つめていく上で、このネットワークの役割を大いに高めていこうということです。

在日同胞企業はグローバル化する経済の流れに乗って世界に出ることができるようでしょうか。三菱総合研究所の予測によると、1993年、日本の海外直接投資は年間五百数十億ドルに達するとしています。(表2)

私たちが力をつけるためには、常に未来を見つめ、“足場”を見つけることに貪欲でなければなりません。その助力になるような機能もこの会で考えていかなければなりません。シンクタンクとまでいかなくとも、科学的なデータを提供できるようなシステムも考えていきましょう。未来志向を貫くようではありませんか。それでこそ、この場に若い経営者のみなさんが集まる意味があるのですから。

以上、おおざっぱではありますが、この会の目指す実利性と啓蒙性を認識していただければ、幸いです。

今後、さらに忌憚なく意見交換し、会を充実させていきたいと思っています。

設立総会后、会員の声

設立総会后、各部屋で行われたディスカッションの中から主な意見を紹介します。

- ◎祖国に対しての愛が目的にある。そこには理屈も何もない。行動だけだ。
- ◎在日の中で10年経験して築いたものをゆずり受けて1年でやりとげたい。いろんな体験談を聞きたい。
- ◎優秀な人材がいらないため事業展開が困難だ。情報がほしいし、こちらの情報も公開したい。
- ◎皆で知恵を出しあい企業経営の試験場にしたい。
- ◎UGでないと得られない情報が必要だ。異業種間の相互情報が交換できれば良い。実際はブロック的活動が中心となるだろうが、他地方とも連絡をとり合える体系ができれば良い。
- ◎手足を広げ、全員の情報が蓄積される中で利益が得られる。裸でつき合う中で自分をみがく場、先行投資と思っている。
- ◎自分より上の人たちを見て刺激を受けたくて入会した。会費を生かすも殺すも自分次第。
- ◎シンクタンクをつくる必要がある。事務局を強化し総合研究所的役割を果たしてほしい。情報を消化するのは自分の決断だ。
- ◎会の中で自己の経営理念を変えていきたい。オーナーの意識改革が必要だ。右往左往しながらも一つずつ掴んでもらいたい。その受け皿となるものがUGだ。
- ◎何をやっていくのか自信がないけど発展途上の会であればいいんじゃないか。みんなで会を育て、子供のように見守ろう。
- ◎人材供給に対して具体的に討議してもらいたい。個人の集まりなのか、会社としての集まりなのか明確に。
- ◎協議会の年齢層とぶつかるのでどのように動けばいいか悔む。協議会との違いを明確にしか、しないとやりにくい。
- ◎シンクタンク組織を作ってみてはどうか。
- ◎本音で話せる会づくりを。